

組織神学：聖霊論 Book Report 1

聖霊—旧約聖書から現代神学まで—

アレスデア・ヘロン著／関川泰寛訳

TTS 教職志願者コース3年 野町 真理

各章ごとのまとめ

第一部 聖書における霊

第1章 ヤーウェのルアハ

1、ルアハの意味

旧約聖書におけるルアハ (ruach) という言葉の WORD STUDY を中心として、旧約聖書における「霊」という言葉が何を意味するかを述べている。ルアハの語源はおそらく空気の変動と関係していたと思われる。それゆえルアハという語は、「風」「息」「生命」、人間の「霊」や「自己」、さらには「気分」「気質」といった多様な意味を持つ。

- ・強い風→圧倒的な神の力のイメージ
- ・霊、自己、魂→考えたり、感じたり、気づいたり、行動したり、責任を負ったりすることのできる人格的神のイメージ
- ・神の霊と人間の霊の密接なつながり→神との関係において存在する人間
- ・ルアハは人間に働く神と、その働きが人間自身にもたらす結果の両方を指し示す。したがってルアハは人間に適用された場合でも、人間の創造者であり、保持者としての神を暗黙のうちにさし示す。すなわちルアハは、神と神に依存する人間の生命の両方を意味する連結語となる。

2、働きにおける神のルアハ

旧約聖書において、神のルアハが語られている四つの主要なコンテキスト(創造と生命の保持、特別な賜物、預言、未来への希望)から神のルアハの働きの範囲と形態について書かれている。

(1) 創造と生命の保持

創造の問題は、旧約聖書全体においても、比較的まれにでてくるにすぎない。そして「無からの創造」という明確な教理は、後になって出てくるにすぎない。創造者としての聖霊という後代のキリスト教教理を支持する材料は新約聖書が示すことをキリスト教の立場から省察するという新しい地平の中で生じた。

(2) この上ない賜物

夢を解き明かす能力などは特別な神の恵みによって与えられたルアハによる。また士師記に特に見られる、まれにみる力あるわざや指導力の中にはルアハの個人への介入によるものがある。

(3) 預言

イスラエル史のサウルの時代において、預言者のイメージとは神のルアハの力に帰せられる恍惚状態で語るものであった。

しかし、捕囚前の預言者たち(アモス、ホセア、ミカ、エルサレムのイザヤ、エレミヤなど)はそれとは異なり、自分がヤーウェのルアハに満たされ、導かれているというようには主張しなかったと思われる。この新しい種類の預言者は、神の靈感を受けたと考えられる恍惚状態で召命を受けたのではなく、主が語られたがゆえに登場したのである。すなわち、超自然的なるものを持っているということより、使信それ自体、主の「言・ダバール」が自ら権威を持つ預言者であった。

捕囚時代にはこの傾向はもう一度変化した。エゼキエルなどは預言を神のルアハによって靈感を与えられたものだとしている。

#### (4) 未来の希望

旧約聖書が語る未来の希望は3つに大きく分けることができる。第一にルアハがその上に、まったくかたちでとどまるダビデ的王、メシアが来ることの約束、第二にイスラエルの民全体の回復の約束、そして第三に個人と神との関係の回復の約束である。

## 第2章 中間時代におけるルアハとプニューマ

### 1、パレスチナ・ユダヤ教と死海文書

中間時代には悪魔論が大きく発展した。すなわち善と悪との終末における黙示的な闘争（パレスチナ・ユダヤ教文学にきわめて共通したテーマ）への期待によってさらに特徴づけられた発展がそれである。しかし異教的二元論は神の究極的な主権についてのユダヤ教的確信によって、はっきり修正されてきた。

### 2、ヘレニズム的ユダヤ教と知恵の伝統

ヘレニズム的ユダヤ教の聖典は旧約聖書のギリシャ語訳、セプトウギンタであった。ヘブル語テキストでルアハが用いられている箇所は四分の三近くが、プニューマと訳された。

七十人訳の影響のもとで、プニューマはルアハとほぼ同じ仕方で機能するようになった。プニューマは神と人との両方に適用され、それは神と人との間の結合語として機能する。プニューマがヘレニズム的ユダヤ教において通常用いられるように、人間の心あるいは自己を意味するために使用された時にさえ、自己充足的なものではなく、神に与えられたものであると考えることは決して事実から離れたことではない。これは旧約聖書が理解するところにきわめてよく一致していた。

プニューマに関する発展は二つの点で注目すべきである。第一にプニューマと預言の結びつきが存在する。旧約聖書の預言だけでなく諸文章全体が、神のプニューマの靈感を受けて書かれたという確信が明確な形をとった。ここにあらゆる異教の文章やもっと後のユダヤ教の文章に対して、旧約聖書独自の權威の拠り所がある。第二の重要な展開は、旧約聖書ではヤーウェのルアハの創造的で生命を与うる力が示されているが、それが神が宇宙を創造し保持するプニューマという、より豊かな概念へと拡張され始めたことである。これは特にヘレニズム的ユダヤ教に独自の聖霊論的思想である。この思想に決定的な影響を与えたのは、神のプニューマと神の「知恵」(sophia)、ヘブル語でホクマー(hokhma) との間に認められるようになった結びつきである。

## 第3章 神の霊—キリストの霊

聖霊は、神がイエス・キリストにおいてなし給うたこと、並びにその神の働きの完成に本来的に関与するものと考えられ、またそのように描かれている。この点が新約聖書を、旧約聖書や中間時代の文書から区別する使信である。この章では共観福音書から始めて、使徒行伝、パウロ書簡、ヨハネ文章、その他の文章を検討し、霊の描き方の多様性を概観している。

### 1、共観福音書と使徒行伝

ルカの聖霊論にとっては使徒2章のペンテコステの説明が中心となる。そこではペテロの説教に最も多くのスペースが割かれている。そしてこの章全体のクライマックスは、この説教がしめくくられる言葉の中にある。霊の新しい注ぎは、イエスの死と復活を通してのみ可能とされた。霊はイエスを通して、イエスに従う者に来た。したがって霊の働きは、イエス・キリスト御自身と本質的に結ばれている。そしてイエスが霊を受けるとともに賦与するという二重の形態は、新約におけるこの問題の新しい理解全体に本質的なものである。

ルカは霊の到来を視覚的にも聴覚的にもきわめて認識可能なものとして描いている。ここにルカが態度を明確にしていなかった問題がある。すなわち霊は洗礼によって与えられるのであろうか。それとも按手によって、あるいは福音の宣教によって与

えられるのだろうか、という問題である。これらの答はそれぞれあたかも決定的であるかのごとく示されている。しかしルカはこの問題に関心を持っていなかったようである。ヘロンはその理由として霊を与えるということは、霊それ自体の本質と真正性を明らかにすることであったから、そして霊の賦与は、それが起こるときに認識されるがゆえに、これらの諸条件の一つにのみとりわけ結びつくことを求めなかったと指摘する（その後ルカ神学における弱点としてここを取り挙げている）。

それでは、使徒行伝における霊の特別な顕現（とその働きの目的）とは何か？霊と特に関係しているのは、異言を語ること、神賛美、大胆な宣教、対抗する際の力、そして最も卓越しているのは、新しいキリスト者の預言、幻、そして教会あるいは個人のための導きである。霊が「送り」、「禁じ」あるいは「しほりつけ」、共同体の中で個人を監督者としてお立てになった。これと関連するのは、霊と「証言すること」との特別な関係である。その支配的なモチーフは交わり、宣教、導きのモチーフである。教会に対する預言者の使信と比べたら異言でさえ背後へと退いている。御霊は主として教会の礼拝とキリストに対する証言力を与えるものとして、さらに教会の生と伝道を導くものとしてあらわれる。霊と教会のこの関係は、使徒行伝に関する限り、きわめて根本的なものであると付言することができるであろう。霊が働くのは、教会においてであり、霊が他者に注がれるのは教会の伝道を通してである。

## 2、パウロ

次に神学的なパウロの書簡を見る。パウロは広いキャンパスの上で御霊の本性、御霊の働き、霊とイエス・キリストの固有な関係についてのもっと豊かな概念とさらに深い説明を与えてくれる。義認から神の子らの終わりの時の顕現まで、信仰から祈りまで、倫理的行動から神を「アバ父よ」と呼ぶことまで、あらゆるものが御霊によって可能とされている。パウロは（a）御霊の働きと、キリストにおける神の働きとのなくてはならない関係を認めている。そして（b）パウロはそれをキリスト者の生命の各人のあり方全体に広がるものとして、また、終末に動的に向かうものとして描いている。

御霊は信仰の生命の内的動きである。その生命は「キリストと共に神のうちに隠されて」（コロサイ 3：3）いるが、その最奥の核心において、神御自身の心から発する交わりや認識、応答の運動に参加することによって形成される。それは私たちのアイデンティティの隠された中心であり、御父に対する子としてのキリストの関係が私たちのうちに反映し、実現することである。そしてさらにそれは神の愛が私たちのうちに鳴り響くことであり、神の知恵が顕現することである。この認識は御霊の倫理的な外への働きについての認識と相俟って、なぜパウロが明らかに「カリスマ的」と思われる二、三の御霊の賜物に御霊を還元することに反対したのかを直ちに説明する。さらに御霊はキリスト教共同体の設立者であるというパウロの確信もまたこのことを説明する。これは I コリント 12～14 章において特に明らかになる。コリント教会のある人々が、異言を語るといったエクスタティックな現象を非常に強調するのに対して、パウロは御霊が異なった多くの賜物を与えることを主張し、孤立した個人に恩恵を与えるものは、教会の徳を高めるものよりもその価値が劣ることを主張する。そしてパウロは、とりわけ最高の賜物は愛であり、それが選ばれた者とその他の人々の間に区別をつけるのではなくて、教会全体を強めると主張する。

## 3、ヨハネ文書

ヨハネのパーспекティブと用語は独特であり、歴史の叙述における御霊とイエスとの全体にわたる関係と、告別説教（ヨハネによる福音書 14 章～16 章）における御霊についての広範にわたる扱いの両方において新しい展望を開く。ヨハネは共観福音書よりもはるかに強く、救いのドラマ全体をキリスト御自身の人格と歴史に集中させている。この転換はまた、イエスに内在し、イエスから流れ出る御霊がとりわけ強調されていることとも一致している。

#### 4、新約聖書のその他の文書

しかしキリストは、すでに成就したすばらしい事からの大祭司として来られ、手で造った物でない、言い替えば、この造られた物とは違った、さらに偉大な、さらに完全な幕屋を通り、

また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所にはいり、永遠の贖いを成し遂げられたのです。

もし、やぎと雄牛の血、また雌牛の灰を汚れた人々に注ぎかけると、それが聖めの働きをして肉体をきよいものにするすれば、

まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とするでしょう。

ヘブル人への手紙 9:11-14

御霊は御父に対するイエスの献身の動機であり力である。それは十字架において頂点に達し、決定的となる。ここで、御霊をイエスが身に帯びることの最も深い意味とイエスの誕生の目的、イエスの洗礼の秘儀、誘惑と悪の力に対するイエスの勝利の真の本質が明らかになる。人間の生命と歴史における神の霊の決定的な現実化は、イエスが御自身を捧げたことに内包されている。そこにも、わたしたちに対する御霊の源がある。

#### 5、さらに生じる問題

御霊についての問題は、それらはすべて相互に関係しているものの、さらに主として三つの主要な領域に区別できる。

- a、御霊と創造
- b、御霊と教会
- c、御父とキリストへの関係における御霊

## 第二部 聖霊論の諸型

### 第4章 最初の点描—二世紀と三世紀

#### 1、エイレナイオス

エイレナイオスは創造者にして和解者である唯一なる神の同一性、神が元来善なるものとして創造した世界の本性、並びにわたしたちの救いの根拠そのものとしてのイエスの真の人間性を再び強く主張した。この枠組の中でエイレナイオスは霊の働きをもまた認めた。

#### 2、テルトゥリアヌス

三つの別々な神を語る方向へ傾かずに、独裁神論に答えを与えるために、テルトゥリアヌスは神の統一は「ギリシア人が経綸（オイコノミア）と呼ぶ」ものによってバランスを保たれていると主張する。そして彼はディスペンサチオ *dispensatio* (二)（「配剤」*distribution* がおそらく最も近い英語）という言葉を用いる。つまりテルトゥリアヌスは神の一性と神の三性、すなわち神のトリニタス *trinitas* (テルトゥリアヌスがこの語を用いた最初のラテン教父であったと思われる) とを一致させる。

#### 3、オリゲネス

### 第5章 生命を与うる主

#### 1、エルサレムのキュリロス

#### 2、アタナシウス

#### 3、カパドキアの教父たちと東方正統主義

- (1) 御霊の礼拝
- (2) 御霊の起源
- (3) 三位一体における聖霊

## 第6章 神の愛、神の賜物、教会の魂

### 1、三位一体についてのアウグスティヌスの見解

アウグスティヌスは御霊それ自身は、御父と御子との愛と交わりの関係以外の何のもでもない、したがって「賜物」と呼ばれるのと同時に「愛」と呼ばれるべきものであるという考えを展開させた。

### 2、中世の三位一体論的神学とフィリオクエ

### 3、教会の魂としての霊

## 第7章 照明するものと聖化するもの

### 1、ルターとカルヴァン

宗教改革者たち自身は、信仰やキリストによる救いや信仰義認、そして聖書の権威がすべて必然的に聖霊と結びあわされていることを十分認識していた。

もし信仰それ自体が御霊の賜物でないなら、それはわたしたち自身のわざとしての「行為」となるであろう。

カルヴァン神学の中心はキリストとの結合。そしてキリストとの結合はただ御霊によってのみ実現される。

「ただこの結合によってのみ、かれが『救い主』の御名をもって来たりたもうことが、われわれにとって無益でないものとなるのである。われわれがかれの『肉の肉、骨の骨』となる聖なる婚姻もこれを目ざすのであり、こうして、われわれはかれと『一体』となるのである。だが、かれがわれわれと一体になりたもうのは、ただ御霊によってのみなのである。この同じ御霊の恵みと力とによって、われわれはかれの肢体となるのである。こうして、われわれはかれのもとに保たれ、他方、かれを所有するのである。」(『キリスト教綱要』3・1・3)

### 教会と個人

教会と個人は等しくキリストにすべてを依拠しているのであり、キリストから目をそらすようにわたしたちをしむけ、キリスト以外のところにわたしたちの信頼を置くようにさせる個人の功績や自己執着というどんな考えも、誘惑であり、迷妄である。御霊は教会に対置された個人を生かすものではなく、両者をキリストへと向かわしめ、両者をキリストに結び付け、キリストのかたちにつくりかえるのである。

(P162-163)

## 第三番目の宗教改革の中心的テーマー聖書において御言葉と関係する聖霊の働き

### ルターの主張

御霊によってわたしたちが神の言葉を聞くことが可能になるときにのみ、聖書は生きた神の言葉を伝える。さもなくば聖書は生きた信仰を喚起しないがゆえに、救いを達成することのできない死せる文字、純粹に外的な言葉にすぎない。

## 2、宗教改革後のプロテスタンティズム

### (1) 内的緊張

契約神学は大きな長所を持っていたが、御霊のわざを選ばれた者の再生の働きに、したがって主に二つの判決によって決定される神の御計画の一方の側だけに狭めてしまうという大きな弱点を持っていた。つまり、契約神学がキリストの完成したわざと聖霊の現在の働きの間に距離を設けてしまったという意味で、そうなのである。また契約神学は、御霊の内的証示を、聖書あるいはウエストミンスター信仰告白の教えの権威に対する形式的同意に還元してしまう危険を冒す、きわめて合理主義的な神学思想のタイプに明らかに傾いている。(P167)

プロテスタントのある教派では、ある種の「回心の経験」をもつ者のみが、真のキリスト者であると共通に考えられるようになった。したがって御霊の働きは、

結果として敬虔の一つの特別な型によって限定されて定義された。本質的には同じ問題は、ペンテコステ主義に属する分派によっても起こることになった。彼らは聖霊が特別な「賜物」を示す人々にのみ、すでに与えられたと考えた。ある次元では、ここでの問題は御霊の賜物を見分けることと関係している。しかし、もっと深い次元では、御霊はわたしたちがイエス・キリストと結ばれていることである、というカルヴァンの主張の要点を見過ごしているところに難点がある。その結果、わたしたち自身の人格的心理学的、知的あるいは霊的歴史の一要素に御霊を事実上還元してしまうことになる。

まったく同じ問題は、17世紀にカルヴィニズム自体の内部で起こった。神の選びと拒斥という隠された判決に置かれた重点は、おそるべき人格的問題、教会的問題を生み出した。いったい人間は自分自身の選びにいかにして自信をもつことができようか。

…しかしルターやカルヴァンの教説のこれ以上の徹底的な転倒を想像することはおそらく困難であろう。なぜならルターやカルヴァンは自己検証に場を与えたが、彼らは救いの確信のためにわたしたちがキリストのみを注視しなければならないと主張したからである。キリストにではなく神の審きに中心を置く神学は、救いへの道を閉ざし、結果としてキリストのわざと御霊のわざとをともに保つことが難しいことをも発見した。(P168-169)

(2) 反三一主義

(3) 「霊」の再解釈

### 第三部 現代の問題

#### 第8章 ペンテコステと経験

##### 1. 自由主義神学と弁証法的神学

もし自由主義神学が、神中心の人間学から人間中心の神学へと陥って、キルケゴールが神と人との「無限の質的差異」と名付けたものを切り捨てる危険を冒しているとするなら、弁証法的神学はその危険を回避しようとするあまり、神学から人間学をすべて切り取ってしまう危険を伴った。

どのようにイエスにおける御霊の働きを描くべきか

サーチャイトは、イエスの教えあるいは模範の上に注がれるのではなく、ケリュグマの上に主として注がれる。それが御霊の働きがその上に描かれるキャンパスなのである。ケリュグマはイエスの経験を単に扱うのではなく、イエスの全人格と運命そして意味を扱うのである。

揺れすぎる振り子

経験に強調点をおく自由主義的なアプローチには、たとえその積義的かつ神学的な遂行に欠点があったとしても、捨てるはならない要素がある。もしキリストの経験と私たちの経験が真剣な興味を注ぐに値しないものとして退けられるなら、私たちは(キリストが人間的魂を持つことを否定したラオデキアのアナポリスの異端におけるように)その人間的な自覚や意識が私たちの救いには無関係であるような非現実的なキリストを宣べ伝えることにおそらく終わってしまうであろう。

##### 2. ペンテコステ運動の挑戦

既成の教会の神学者たちは、ペンテコステ主義の主張(すなわちキリスト者の生命は御霊における生命であり、御霊の変革し生命を与える力の明白なしるしを、その本性から表わすものであるという)は、他の教会が長い間忘却し続けてきたものを正しく思い出させるものではないのかどうかと真剣に考え始めた。レスリ・ニュービギンは三つの広い意味での教会論の形態を跡づけた。 sacramentalな教会論、御言葉の教会論、御霊の教会論である。

## 第9章 霊、自己、世界

- 1、人間における霊
- 2、この世における霊

## 第10章 父と子と聖霊

- 1、ジョフリイ・ランプとパウル・ティリッヒ  
ジョフリイ・ランプによる三位一体論の拒否。
- 2、カール・バルト

バルトにとって、三一論は組織神学の探求の最後に達成される最終的な総合あるいは結論ではない。むしろ、神的三一の形態はあらゆる次元にわたって本質的なものである。このように述べることによって、バルトは三一論が神学の出発点であることを意味しているのではない。なぜなら唯一の出発点は（そして不断にそこに向くべき点は）、イエス・キリストにおいて、またイエス・キリストによって神が御自身を啓示するという恵みに満ちた秘儀だからである。

真に重要なことは、これら啓示理解と三一解釈はともに、神学的省察の生きた運動の中で要約され、御霊においてわたしたちと出会い関わる御父の顕現としてのイエス・キリストのよる「イースター・聖金曜日・ペンテコステ」によって導かれ、方向を示されるということである。

### 3、最後の省察

#### (1) 三位一体論

三位一体論はキリストにおいて私たちに会うために降下し、御霊においてその内側から私たちを支え給う神の自己卑下によって、私たちのうちに喚起される頌榮的な答えとして理解されるべきである。

#### (2) 「第三位格」としての霊

御霊は神であるが、それはうちに働き、私たちが聖霊としての御自身にではなく、受肉した御子に導き、この御子において御父に導く神である。

#### (3) フィリオクエ

東方教会は、御子と御霊の唯一の源と起源として御父を描く。その際御子と御霊のそれぞれが、生誕と発出というふさわしく対応的でありながら独自の様式によって、御父から発する。それに対して、西方は、御父と御子の共通の愛であり賜物である御霊の唯一の源として、御父と御子とを理解するようになった。

## 感想

非常にバランスのとれた、また現代の聖霊運動の良い点と注意すべき問題点を歴史的、解釈学的にどう捉え、どう接していったら良いのかを考えるきっかけがつかめました。幅広い内容なのでまだディスカッションというところまでは深く読むことが出来ていませんが聖霊と聖霊の働きをどうとらえるかが鍵だということはつかんだような段階です。

ディスカッション1：愛は御霊の賜物？：私は愛は賜物というよりは御霊の実であると考え。ガラテヤ書5：22、23に御霊の実（単数形）として愛が挙げられているからである。賜物ならば与えられていないので愛せないと開き直すことへの逃げ道をつくってしまう。最も優れた道としてのキリスト道は愛であるキリストを追い求める（ディオコー）道なのではないか。

ディスカッション2：

聖霊論的パースペクティブで見る救い（聖霊の御業）の所与と課題には以下のような組織神学的フレームワークがあると思われる。

- 1、御霊の証印→御霊に満たされ続けなさい。（関係概念）
- 2、御霊の内住→御霊の実（単数）を結びなさい。（実体概念）
- 3、御霊の保証（手付金）→御霊の賜物（複数）を用いて互いに仕え合い、キリストの教会（共同体）を建て上げなさい。（目的概念）